

農業共済新聞 千葉版

掲載号	5 月 2 週号	
筆者	所属	農林総合研究センター
	職名及び氏名	上席研究員 大谷 徹
題名	ビワ害虫カメムシの薬剤防除について	
備考	【図説明】 ビワを加害するカメムシの殺虫剤による防除体系	

【本文】

果樹害虫のカメムシは年により大発生します。南総地域で栽培されているビワでは、摘果や袋がけ作業後の4月から収穫期の6月にかけて成虫が園地に飛来し、果実を吸汁、加害します。以前はビワのカメムシに対する登録農薬がなく、大発生時にも十分な対策がとれない状況でしたが、現在では殺虫剤3剤が使用できるようになっています。

ビワ園は傾斜地に立地することが多く、1回の農薬散布にも作業者に大きな負担がかかるため、園内に次々と飛来するカメムシに対して使用する殺虫剤は、散布後も効果が持続することが望まれます。現在使用できる剤はいずれも残効性が高く、散布後に飛来した成虫に対しても殺虫効果が期待できます。さらに、果実吸汁を阻害する効果も継続します。各剤の特徴や使用基準を考慮して、以下の処理法を推奨しています(下図参照)。

収穫まで14日以上のある期間がある時期にカメムシが飛来した場合にはアドマイヤーフロアブルを使用し、カメムシの活動が活発になり被害を受けやすい5月後半には収穫7日前までに、効果が最も高いテルスター水和剤を使用します。また、収穫直前や収穫中に防除が必要な場合には、収穫前日まで散布可能なロディー水和剤を使用します。なお、ビワの収穫期は年によって大きく変化するため、果実の肥大や着色、殺虫剤の収穫使用前日数と使用回数に注意して、散布時期を決定してください。

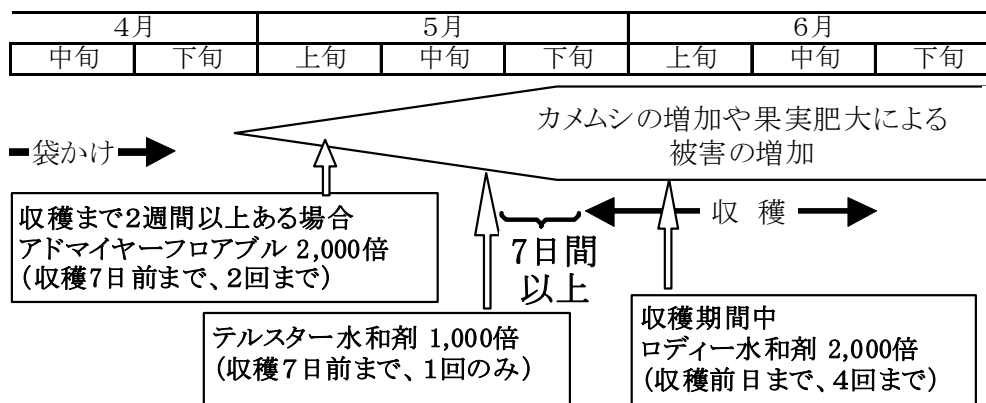


図 ビワを加害するカメムシの殺虫剤による防除体系